

聖女の姉ですが、宰相閣下は  
無能な妹より私がお好きなようですよ？

## 登場人物紹介 character

**エドヴァルド・イデオ**

アンジス国の冷酷な宰相。  
レイナのことを深く愛し、  
執着している。ギレンに  
軟禁される中、自分の過去を  
追想することになった。

**レイナ（十河 怜菜）**

異世界に『聖女の姉』として  
召喚された。軟禁されている  
エドヴァルドを救出するため、  
隣国ギレンに潜入中。  
非常に聡明だが、  
時折無茶を働く。

**イザク**

『鷹の眼』の副長。  
薬学に長けていて、  
時折ラドサイエン  
ティストな一面を見せる。

**エヴェリーナ・ギレン**

ギレン国の王妃。  
情に流されない策略家。

**クノフローク・キスト**

王立植物園研究施設の室長。  
甘い美貌を持つが、実は思慮深い。

**イオタ**

レイナの護衛として  
ついた少女……  
に見えるが……？

**マナ（十河 舞菜）**

レイナの妹で、異世界に  
召喚された『聖女』。  
今回知らない間に  
危機に立たされる。

プロローグ いざ、ギーレンへ

乙女ゲーム兼、戦略シミュレーションゲーム『蘇芳戦記』に登場する国は、アンジェス、ギーレン、バリエンダール、サレステーデ、ベルイフの五つ。

国ごとに主人公となるプレイヤーがいて、各国を繋ぐ『転移扉』を奪われないようにすることが、ゲームの根幹。

それだけだとソフトとして売るには弱いとの考えが運営にあったのか、プレイヤーが攻略すべきキャラクターはことごとく美形であり、シナリオの中には恋愛要素満載のエンディングも存在していた。

故にこのゲームは乙女ゲームとしての側面も保持していて、攻略本だかキャラクター本だかが公式に発売されるほどには人気だったのだ。

——まさか自分が、そのゲームに酷似した世界に召喚されることになろうとは、思いもなかったけど。

それこれも、先に異世界召喚された双子の妹が、自分が楽をするために姉をも召喚させるとい  
う、馬鹿なことをしてかしてくれたせいだ。日本最高峰の大学で自由な大学生生活を満喫するはずが、  
ある日いきなり喚びつけられた先は、アンジェス国。しかも現状片道切符。

このままいけば、異世界に来てまで妹の踏み台。そんなことは許容出来ない、召喚に関わった  
一人である宰相エドヴァルド・イデオンに直談判し、王宮住まいの妹と距離を置く苦肉の策として、  
イデオン公爵邸に落ち着くことになった。

とはいえゲームのシナリオ通りならば、エドヴァルドには常に断罪や暗殺の危険が付き纏う。未  
来のことは不透明ながら、一宿一飯の恩は返しておかねばと、私はフラグを折るべく動き回った。

結果、国家機密漏洩による断罪劇は起きなかったし、エドベリ王子暗殺も起きなかったし、当然  
その責任を負ってエドヴァルドが国外追放されることもなかった。

……そう、国外追放のフラグも折れたはずだったのだ。

けれど、シナリオの強制力が働いたのだろうか。

各国を繋ぐ「転移扉」を維持する者。アンジェス国の当代女性であり「聖女」と呼ばれる者——  
妹の舞菜のことだけ——による、隣国ギーレンの「転移扉」視察という外交業務が急遽生じ、お  
目付け役としてエドヴァルドが共に行くことになった。

追放ではないにせよ、彼は「国外に出る」ことになったのだ。

しかもこの視察、裏ではギーレンの第二王子エドベリと、アンジェス国の国王フィルバートによ  
る「賭け」が絡んでいる。

ギーレンから亡命してきた、ギーレン側のヒロイン、シャルリーヌを取り戻したうえで、エド  
ヴァルドも「アンジェス国の聖女」も取り込みたいエドベリ王子と、少なくともエドヴァルドは手  
元に残したいアンジェス国の国王陛下。

現在イデオン公爵邸住まいの私としては、エドヴァルドにギーレンに留まられては困るし、今で  
は気の置けない友となったシャルリーヌも、アンジェスにいてほしい。

妹は——「聖女」の肩書がある内は、どこにいても無下にされはしないだろう。

喫緊の課題は、旅立ったエドヴァルドと妹が、ギーレン国に着いた途端の「転移扉」の故障で、  
アンジェス国に戻れなくなっていること。

故障なんて恐らくはでたらめで、今頃はエドヴァルドと妹をギーレンに引き抜こうと、あれやこ  
れやと策が弄されているはず。

一往復可能な『簡易型転移装置』を貸し出すというフィルバートの意図は、外交問題にならず、  
ギーレンに付け入る隙を与えず二人を帰国させることだろう。いや、本当に「二人」と思っている  
かどうかは、怪しいところだろうと私は思う。

サイコパスな国王サマの思惑など、考えるだけで背筋が寒くなる。

王と王子の「賭け」は動き出し、私の手元には今『簡易型転移装置』がある。

このまま日が経ったとて、故障は絶対直らない。

——だから私はギーレンに向かうのだ。

ギーレン側の思惑を壊し、シナリオの強制力に抗うために。

## 第一章 シーカサール王立植物園へ

いきなり部屋の中への転移は、不法侵入扱いになるからやめようね——と、シャルリーヌに言ったものの『簡易型転移装置』の性質上、どこかの扉同士を繋げる必要はあるらしい。

なのでとりあえずシャルリーヌには、ベクレル伯爵家の玄関ホールをイメージしてもらい、イデオン公爵邸の玄関ホールと繋ぐ形で、転移を行うことにした。

とはいえ魔力ナシの私では起動すら不可能なので、ここは大人しく、同行してくれる公爵邸の護衛「鷹の眼」の長・ファルコに起動を頼んで、先導も兼ねて先に扉の向こうに行ってもらうことにしたのである。

私がちよつと及び腰になっているのを察した「鷹の眼」ナンバー2、イザクが背中を押してくれる形で、セルヴァンやヨンナといった使用人たちの縋るような視線を背に、私はギーレン国への扉をくぐった。

「とりあえず今、侍女に先触れの手紙が行ったはずだつてコトを伝えて、伯爵か夫人か——つて形で取次ぎを頼んだから」

暗闇の視界は、あつという間に見慣れない建物の玄関ホールに変わる。そうして一歩足を踏み出した先に、ファルコの背中があり、そんな声も耳に届いた。

「しっかしホントに、扉を抜けたらギーレンでした——とはな」

「え、ファルコも「転移扉」使うの初めてなの？」

「小型の装置で手紙やら水やらを移動させるのは見たことあるが、人の移動となると、簡易だろうと煩雑だろうと、王宮の管轄だぞ。お館様の部屋にあるのだって、定例報告の時期だけつてことで許可されてる装置だから、基本的に お館様以外は使わねえよ」

「あ、そうなんだ……」

言われてみれば、それもそうだ。

一般市民が気軽に転移による移動が出来るなら「転移扉」や「扉の守護者」を巡って争いなど起きない。うっかり「蘇芳戦記」の根幹部分を失念していた。

「失礼、娘の……シャルリーヌの友人のご令嬢というのは——」

そうこうしていると玄関ホールの奥がやや騒がしくなり、少しして壮年の男性と女性とが、連れ立って現れた。

私はファルコの前へと一歩進んで、カーテシーをする。

「私が手紙を差し上げました、レイナ・ソガワです。正式な礼儀作法には程遠い急な訪問となりました点については、幾重にもお詫び申し上げます——」

私の言葉に、壮年の男性は目を見開くと優しい笑顔とともに首を横に振った。

「ああ、いや、堅苦しい挨拶は抜きにしてもらつて結構だ。まごうかたなきシャルリーヌの筆跡で、くれぐれも貴女のことをよろしく頼むと……ボードリエ伯爵からの口添えまである。レイナ嬢、ベ

クレル家は貴女を歓迎しよう。私が当主のロドルフォ・ベクレルだ。隣にるのが、妻のフィロメナ、シャルリーヌの継母だ」

「ええ、そうですよレイナ嬢。聞けばあの子と、とても仲良くして下さっているとか。どうぞお入りになって。最近のシャルリーヌのことをぜひ聞かせて下さいな」

ベクレル伯爵夫妻はそう言うのと、心からシャルリーヌを心配していたと分かる表情で、私を邸宅の奥へと案内してくれた。

私の後ろには、結局ファルコやイザク、王宮護衛騎士のトーカーレヴァにシーグを含め、計七人が同行している。あらかじめシーグには、女の子の恰好をして、私の専属侍女見習いを装うように言い聞かせてあった。

いや、シーグはもともと少女だからその言い方もおかしいのだけど、双子の兄リックと、エドベリ王子の侍従「シーグリック・アルビレオ」を交代で演じている訳だから、普段の恰好と身バレの危険が跳ね上がるのだ。だから今は、専属侍女見習い。本人も渋々それを受け入れていた。

「じゃあ、俺は——」

ファルコが「宿を探してくる」と言っただけで席を外そうとしたものの、それを耳にしたベクレル伯爵が、屋敷への滞在を勧めてくれた。ある程度予想していたとはいえ、ファルコたちはむしろ、いざという時に動きづらくなるからと、滞在を固辞。私とシーグだけをベクレル伯爵邸に残す形で、最終的には折り合いがついた。

シーグは最初ちよつと渋っていた。けれど私が「侍女の仕事を勉強することは、将来の潜入捜査

には確実に役に立つ」と言っただけで、名を捨てて実を取ったようだった。

「そういえばファルコ、ギーレンの言葉話せるんだ」

ベクレル伯爵と言葉を交わす姿に驚いていると、ファルコの眉間に皺が寄った。

「……これでも一応、鷹の眼」預かってんだが。アンタの中の俺は、どういう立ち位置なんだ」

曰く、エドヴァルドの密命で色々な所に探りを入れる関係上、「鷹の眼」の皆は、アンジェスの言葉以外にも、最低一つは外国語が話せるらしい。

「えっと……ベルセリウス將軍の親友？」

「俺も『脳筋』枠なのかよ、おい！」

そもそもこちらに「脳筋」の概念はなかったらしい。だけど私が將軍に会った当初、もちろん將軍のいないところでポツリと「脳ミソまで筋肉で出来ていそうな人種」と呟いたところ、主にファルコとウルリック副長に大ウケしたのだ。

アンジェスに新語が受け入れられた瞬間だった。

「口より手が先な事は間違いないからな」

淡々とそう言っただけで、私に賛同してくれるのはイザクだ。

イザクを含め「鷹の眼」の他の皆も、ギーレンの言葉に不自由しない者の中から選ばれたようだ。

元特殊部隊所属、現王宮護衛騎士でもあるトーカーレヴァ・サタノフ青年に関しては、実家が子爵家なため、貴族教育の一環として、ギーレンの言葉は習得していたらしかった。

これじゃ連れて行くのを拒否する理由がないと、ファルコが愚痴っていたのだ。



「じゃあ、まあ……コレは貴女に、まずは預けますよ。私あるいは『鷹の眼』と連絡を取りたい時には、この子を飛ばして下さい」

そして、トーカレヴァが来たなら――

「……リファちゃん！」

「いいですか、預けるんですからね？ 飼っていいってコトじゃないですから、くれぐれもお願いしますね!？」

異世界版シマエナガ、もとといへリファルテのリファちゃんを掌てのひらに乗せられた私は、人差し指でリファちゃんをそつと撫でる。

かわいい……と、すぐ傍でシーグさえも呟く愛らしさである。

「でしょ!？ こちらでお世話になる間は、アナタにもこの子のお世話を手伝ってもらうから、お願いね?」

そう言うのと、シーグはコクコクと首を縦に振った。

護衛の宿ならば、信頼出来る所を何軒か紹介するからと、執事と思しき男性に声をかけられたファルコたちが別室へと消え、私とシーグは、伯爵夫妻と共に応接室へと場所を移した。

ソファに腰を下ろしたべくレル伯爵が口を開く。

「レイナ嬢。私たちは本当に、貴女に感謝している。この国に居た間も、娘は将来の王妃としての教育に振り回されていた。友人という言葉さえ、娘から聞くことはなかったのだ」

伯爵の表情からは、当時を思い返しての辛さ、後悔が窺える。

貴族社会では、第一王子の婚約者に選ばれるのは、普通、とてつもない栄誉ステータスだし、伯爵家の側からおいそれと異を唱えられるものでもない。

ただ、シャルリーヌが孤軍奮闘していたことには気が付いていて、実父の目からは、娘に負担を強しいと映っているようだった。

「それが、貴女を『初めて出来た、ただ一人の親友』だと言っていた。アンジェス国の社交の場では、エドベリ殿下と遭遇しないようにと、国王陛下と交渉までして下さったと。その親友が困っているのだから、今度は自分が手を貸すのだと……私たちが、それに『否』と言うことなどありえない。レイナ嬢、どうかここを第二の実家とも思っただけなんでも相談してほしい。出来る限りのことはさせてもらう」

そう言った伯爵の隣で、フィロメナ夫人も頷いた。

「シャルリーヌは、そもそのパトリック殿下とのご縁を繋いだのが私であると分かっていますが、最後まで一言も責めませんでしたの。ギーレンを発つ直前にも『お義母様は、私のためによかれと思って動いて下さったのだと分かっていますから。ただただ、こうなる未来を崩せなかった自分の力不足だ』と、そう言ってくれましたの」

そういえばシャルリーヌは、実母が亡くなって、父親が再婚したのを機に前世の記憶を取り戻したように思うと言っていた。つまりフィロメナ夫人は、べくレル伯爵の後添いということだ。

けれど二人は、心から娘の心配をしているといった感じだった。

「婚約破棄騒動の後『もう、王族関係者には近づきたくない』と言われた時には、たとえエドベリ

殿下から内々に仄めかされようとも、もう娘を王族の犠牲にはすまいと、そう思ったのですよ。国内の修道院では、権力にモノを言わせて連れ戻されかねないから、国外に出させてくれと言われて、親戚が以前嫁いだアンジェス国のボードリエ伯爵家と連絡をとった」

「あちらは何年か前の政治的な争いで唯一のお子様だったご長男を失くされて、その奥様とお子様は、奥様のご実家に返される形になって……今はご夫婦のみで暮らしですから、二つ返事で承諾していただきましたのよ」

——どうやらここにも、フィルバートの即位に際して、第一王子派や第二王子派に肅清がかかった話の犠牲者がいたらしい。

言われてみれば王都のボードリエ伯爵邸には、伯爵夫妻とシャルリーヌ以外の家族の姿がなかった。

実際の領地の方に、家族なり一族なりいるのだらうと、勝手に思っただけだ。

そこまではゲーム設定になく、ボードリエ伯爵からもシャルリーヌからもまだ話を聞いていなかった私は、気取られない範囲で目を睜りつつ、答えた。

「……王都学園理事長を務めておられるだけあって、ボードリエ伯爵は、大変な人格者でいらつしやると拝察しております。彼女が養女となった先があの方で良かったと、私も思います」

ボードリエ伯爵家全体がシャルリーヌを実の娘と思い、接しているのだということは、私の短い滞在時間からでも読み取れる。

そんな私の言葉に、ベクレル伯爵夫妻は何度も大きく頷いていた。

シャルリーヌの「前世」の話がこの夫婦が知っているのか、あらかじめ聞く時間はなかった。だから向こうから話が出るまでは、こちらからは口にしない方向でいく。

「レイナ嬢、その……ボードリエ伯爵からの手紙には、エドベリ殿下はまだ、娘のことを諦めていないとあって……いや、そこまでは分からなくもないが、それ故に、アンジェス国の国王陛下が今、楯となって下さっているとあったのは、一体……」

ボードリエ伯爵は私のこと以外にも、現時点で娘が置かれている状況を、どうやら正しく手紙に書き記していたらしい。

書かれた文面をそのまま受け取ると、フィルバートがシャルリーヌを気に入って囲い込んでいる風に受け取られかねないので、私は慌てて両手を振って否定した。

「変な意味にとって下さらなくとも大丈夫ですよ、伯爵。本当に、文字通りの『楯』ですから」

「しかし……」

「今、アンジェス国の宰相閣下と『扉の守護者』である聖女が、外交名目でギーレンの王宮に滞在しています。ギーレンの上層部は、彼ら両名を国のためにギーレンに取り込みたいと、今現在、事実上の軟禁に追い込んでいるんです」

「なっ!？」

伯爵夫妻が目を見開く。私はそれを見て苦笑した。

「……すみません、一応『外交』という名目なので、ギーレン王家側も正面からそんなことは認めないと思いますが、実際はそういう状況なんです」



困ったように微笑む私に、ベクレル伯爵夫妻は言葉を失っている。

「だから国王陛下は、とっさにシャルリーヌ嬢をアンジェスの王宮に留めたんです。ああ、物理的な話ではないですから、御心配なく。私が、エドベリ殿下がシャルリーヌ嬢に執着していることを陛下に伝えたので、陛下がシャルリーヌ嬢の名前を使って、エドベリ殿下を牽制したんです。宰相と聖女の状況次第では、こちらにも考えがある——という形で」

「だから……『楯』……」

「宰相を帰してほしい陛下と、ギーレン王家に強制送還されたくないシャルリーヌ嬢とが、一時的に手を組んでいる形ですね。彼女はアンジェス国でも、自分の意志を貫いて頑張っていますよ、伯爵。私にとっても、大事な、誇れる親友です」

あえて「宰相」としか言わないのは、私の稚気のようなものだ。『賭け』の話など、実父に出来ようはずもない。アンジェス国でも自分らしく頑張っている——そう言った私の言葉に、伯爵は大きく反応していた。

「では貴女がギーレンに入国して、娘が『手を貸したい』と言ったのは……貴女の言うように、宰相殿と聖女殿が軟禁状態にあるからということなのか……」

「伯爵にご迷惑をおかけするつもりはありません。こうやって、一時の宿をお借り出来ただけで充分です。もしかしたら帰国の際にもまた、こちらを訪ねさせていただくかもしれません——」

「いや。こちらは婚約破棄以降、王家とは距離を置いているし、エドベリ殿下が娘を望んでいることは、まだ公<sup>おおよひ</sup>にはされていない。外野から見れば主流を外れた斜陽の貴族になる訳だから、以前

のように我が家に取り入ることを目的とした家の関係者が押しかけて来ることもない。これから何かしら動くことを考えているのなら、気にせず拠点としてくれて構わない」

気にしなくていいと、ベクレル伯爵は片手を上げた。

「そもそもこの邸宅自体が、王都から馬車で三十分程の距離にあるから、私たちは王都に住んではない。色々動いたとしても、露見はしにくい所にあると思うが、どうだろう」

ギーレン王都から馬車で三十分ほどの所にシーカサリという街がある。

そこにある国家最大規模の王立植物園の管理が、ベクレル伯爵家代々の責務らしい。大規模な植物研究施設も併設されていて、いざという時にはその研究員や、他国からの研究施設への留学生を装うことも可能だと、ベクレル伯爵は提案してくれた。

思いがけない申し出に、私は小さく頷いた。

「それは……助かります」

「これが王族の暗殺を仕掛けるとかだった話は別だが、貴女はただ、貴女の大切な人を迎えに来ただけだ。私はそんな娘の友人に、部屋を貸す。それで良くはないかな」

答えに困る私を、ベクレル伯爵夫妻は生温かい目で見ている気がした。

(……手紙に何をどこまで書いたの、シャーリー)

よろしく願います、以外に言いようがないじゃないかと、内心で八つ当たりしそうになる。

「他にこちらが手伝えることはあるだろうか？ 本当に、遠慮は不要だ」

重ねて問いかけてくれたベクレル伯爵に、私は少しの間、小首を傾げて考える仕種を見せた。

「王立植物園があつて、研究施設が併設されているということでしたら……」  
「うん？」

「お言葉に甘えて、二人ほど『留学』させていただいても構いませんか。あと、研究誌の製本なり出版なりに携わっておられる関係者の方がいらつしやったら、ご紹介いただいてもいいですか」

私の言葉に、今度はベクレル伯爵の方が首を傾げた。

「留学の話したのはこちらだから、それはもちろん構わない。が、出版関係者というのは……？」  
「ちよつと、出版して広めたい記事というか……物語が、ありまして」

「物語？」

「ちよつとした、恋愛小説です。事実か想像かは、読み手に任せて、じわじわと広げていきたい——まあ、情報戦の一環と認識していただければ」

とある国の大臣が、外交先で王の庶子との縁談を持ち掛けられたが、彼には平民の恋人がいたため、それを拒否。隣国の王族と縁を結ぶことより国に戻ることを望むも、優秀な彼を手元に置きたい隣国は、あの手この手で彼を引き留めようとする。

その策の一つが、平民の恋人の暗殺。

平民の恋人は、自らの身が危うくなるのも顧みず、彼を取り戻そうと隣国へ——

登場人物の名前はフィクションだ。それ一冊なら、ただの恋愛小説だ。

ところがそこに「何故、王の庶子を隣国の大臣に嫁がせなければならないのか？」という疑問とその答えとして、失われた一族の血胤<sup>オーグレーン</sup>を仄めかすことで、状況は一変する。

この本に書かれていることは事実なのか？

いっこうにアンジェス国に宰相が帰国しないのは、この本の通りに、彼こそが失われた血——すなわちオーグレーン家の血を持つているからなのか？

だとしたら、国で待つ「愛妾」とは引き裂かれてしまうのか？

登場人物である「平民の恋人」は、物語通りに決死の思いでギーレンに入国して、国に残ることを強要されている「彼」と、手に手をとって駆け落ちするのか？

噂が広まれば広まるほど王家の動向が注視されることになり、国内、諸外国からの評判を気にするならば、無理を通せなくなる。

それが私の狙いだった。

「いくら軟禁状態だと言っても、イデオン宰相を勝手に連れて帰ったら、さすがに国家間で問題になりますから。途中で帰国させる気になつてくれればよし、それがダメでも、ある程度この話が広がれば、仮に勝手に出国したとて、ギーレン王家からは強く出られないはず……と、思っています」

「レイナ嬢……その話は……」  
事実なのか。

そう言いかけたベクレル伯爵に、私はニツコリと微笑<sup>わら</sup>つてみせた。

「伯爵、実際には、ギーレン王家がオーグレーン家を再度興<sup>も</sup>そうとしていることと、アンジェス国の宰相閣下が国内に留め置かれたままだという事実があるだけです？」

「そうか……イデオン宰相が、オーグレーン家の血を引く証拠などどこにもない……むしろ、ありがちなゴシップの一つとしか誰も思わない……」

「そうですよ。血を引いていようと引いてまいと、それ自体はどうでもいいんです。人は所詮、信じたい方を信じる訳ですから。だから私は、ちよつとそれを誘導しようとしているだけです。私の住んでいた国では『脳内補完』って言うんですけど」

そう言つて、私は半ば呆然としているベクレル伯爵に、自分の頭を指差してみせた。

「足りない情報を頭の中で勝手に想像して補完する——っていう意味なんですけど。一部であれ真実が混じる分、その物語を広めれば、足りない情報こそが真実なんだと、認識する人は絶対に一定数出てきます。王家の権威を楯に否定にかかれれば、尚更真実味が増してくる。そうやってじわじわと、王家の動きを制限していくのが狙いです」

「だから……出版？」

「本でも大衆紙でも。刊行の形式にはそれほど拘つてはいません。より多くの人に行き渡る形であればいいかなと。植物研究施設があるなら、研究成果を残しておくための本を出版されてるかなと思つてのお願いです。ご紹介下さる方が私の考える『出版』と方向性が違うようなら、話をしてみて、それに即した方をご紹介いただけないか、その方に尋ねてみますし」

「あ、ああ」

「御心配なく。私が誘導したいのは、あくまで王家です。一般には『よくできた恋愛小説』として、広まるだけです」

私は、エドヴァルド・イデオンの実父がギーレンの元王族アロルド・オーグレーンだなどと、誰にも、一言だつて話してはいない。

ただ表に出ている事実には多少の脚色をして、どこまでが真実なのかを有耶無耶にしたフィクション小説を広める。それだけだ。

グレーゾーン？ もともとそれをしてきたのは、ギーレン側だ。

「王立植物園の研究施設に『留学』させて下さいますか、伯爵」

言わなきゃよかったかも——なんて、もう言わせませんからね、ベクレル伯爵。



「さあさあイザク、薬草の事を色々教えて？ 王立植物園の研究施設に留学するのに、何も知らないのはマズいでしょ？」

夜。

夕食を伯爵夫妻と共にいただいた後で書斎を借り、そこでペシペシと机を叩いた私に、イザクは無言で眉を顰めた。様子を見に一緒に来たファルコの方が、柳眉を逆立てて声をあげる。

「アンタこの前、俺とセルヴァンが調合の様子見せるのを却下したコト、何気に根に持ってたな！ ドサクサ紛れに、黙って見てるより物騒なコトしようとしてんじゃねえよ！」

「失礼ね！ なんだって、知らないよりは知っていた方がいいでしょう!? なんで私が勉強したか

らって、物騒な用途限定だと思うのよ！」

「テメエの胸に手を当てて考えやがれ！ 逆に聞くんが、物騒なことに使わないって言えんのか!？」

「エドヴァルド様のため限定だったら、ファルコだって使うでしょう!? ご不満!？」

「あのなあ……！」

どこの下町オカンだ！ と言いたくなるような、公爵家の裏方を担<sup>にな</sup>っているとは思えない心配ぶりである。そのうちお互い「がるる」とでも言いそうな勢いだったけど、さすがにイザクが割って入ってきた。

熱血型のファルコとは対照的に、冷静沈着なのがイザクだ。トップとナンバー2は、なんだかんだ言っているいいコンビネーションなのだ。

「そもそも、薬草の知識と言っても幅広過ぎる。一朝一夕でどうにかなるものじゃない。王立の研究機関ともなれば尚更だろう。俺はともかく、潜入するには無理があるぞ」

「潜入じゃなく、留学だよ？」

「俺らは屁理屈を聞きたい訳じゃない」

「出版関係の人を紹介してもらうため、っていうのはダメなの？」

「それならトーカレヴァでもいいはずだ」

とはいえ、思うところはあったらしい。今度はこつちが「がるる」となりそうな状況になってしまった。私が折れないでいると、イザクが溜息を吐き出した。

「どっちにしても、今から薬草の勉強っていうのは無理がありすぎる。それでも、どうしても研究

施設に行きたいなら……まあ、方法がないことはない」

「えっ」

イザク、とファルコが睨んでいるのには構わず、そのまま話を続ける。

「俺なら薬草の研究でいいが、お嬢さんは変えた方がいい。そうだな……以前ヨннаに『予防医学』とやらの話をしたことがあるだろう。身体にいい野菜があるとかどうとか。その研究だと言えど、多少薬草の知識が不足していても新たな領域の研究だからと、疑いの目は向きづらいはずだ」  
そういえばそんな会話をヨннаとしたことがあった。

いつ、どこで聞いていたのかなんて疑問は、“鷹の眼”の間では無意味なんだろう、きつと。

「もちろん、基礎の基礎くらいは頭に叩き込んでもらう。専門の施設で研究しているような連中と、同じステージには上がらない方がいい」

なるほど！ と、私は大いに納得した。要はオタクに勝負を挑むような真似はするなということだ。

「それだったら、一緒に研究施設行ってくれる？」

肩をすくめつつも私の言葉を否定しないイザク。聞こえるように舌打ちするファルコには気付かないフリ。私はニッコリ笑って、さあ説明！ とばかりにもう一度机をペシペシ叩いた。

「……とりあえず、俺とお嬢さんはどういう設定で『留学』することになってるんだ」

「えーっと……私が商業ギルド発行の身分証を持つてるから、フィロメナ夫人のご実家がある領の商会の跡取り娘ってことで、薬草部門新設のために、専属薬師と二人で研修に来た——的な？」

「また、ありそうな話だなオイ……」

いっそ感心したようにファルコが呟いている。

「本業は銀取引にしておこうかと思つて。まだ使い道は決めてないけど、もしかしたらハッターに使えるかもしれないし」

「お館様がセルヴァンに命じて押さえさせた銀かよ……」

「そうそう。無理言つてセルヴァンに保管庫から出してもらつたの。レイフ殿下が繋がつてたのつて、パトリック元第一王子、現在の辺境伯でしょう？ もしかしたら、エドヴァルド様に資金源を絶たれて崖っぷちかもしれない。今、それで辺境から身動きが取れないっていうなら、銀をチラつかせるだけでも、あらゆる所に牽制かけられるからね。実際に売るかどうかは、また別の話だから心配しないで」

「……まあいいけどな。どうせアンタが公爵邸に戻ってから、お館様にこっぴどく叱られるだけだろうから」

肩をすくめるファルコに思わず「え」と、声が洩れたけど、何を今更驚いてんだと返されてしまった。

「当たり前だろう？ 一人でどんだけ無茶してると思つてんだよ。公爵邸でじつとしてた日つてあるか？ 倒れなきゃなにしてもいってモンじゃねえだろうが」

「いや……だって……不可抗力の積み重ねというか……」

「その言い訳、お館様にも聞き入れてもらえるといいな。まあ、俺は無理だと思ふけどな」



「……そうだな」

イザクにまで額かれると、地味に傷つく。

「ええ……そんなあ……」

「なら、研究施設行くの止めるか？ 俺は一人で行ってこいと言われても、いっこうに構わないが。なんだつたら、アンジェスに戻ったって別に誰も責め——」

「ダメ！ それはダメ！ だって、私ありきで計画立ててるもの！」

食い気味に私が反論すると、イザクはファルコと顔を見合わせて、大きな溜息をついた。

「……『懲りる』という単語、多分行方不明のまま二度と戻らないんだろうな」

「だな。アンタ、そういうところがな……残念っ！ か……なあ……」

まったく、失礼な「鷹の眼」ツートップだと思う！

「もう、いいから説明！ ファルコはとりあえず、イザク以外の残りを連れて、エドヴァルド様が王宮なのか、他の貴族の館に招かれているのか含めて、今、どこにいるのかを探り出して？ 迎えに行くにも、まずは居場所を突き止めないと」

「ハイハイ。ま、そりやそうだ。だが、そう時間かからないと思うぜ？ フイトとナシオ付けてるしな。ただ、居場所が分かっても、近づけるかどうかは別問題になるからな。王宮にだって似たような組織はあるだろうし」

「あ……分かった。場所が分かかって、フイトとナシオに常時連絡が取れるようになったら、次の行動考えるようにする。あとシーグは……」

「ここ、王都から馬車で三十分くらいかかるんだろう？ 下手に王都行く方が身バレの危険が高くなるぞ。専属つつてんだから、大人しく連れ歩け」

言い方は悪いながら、シーグの心配もしてくれていたようだ。

「はい。うわあ、じゃあ私が一番薬学の知識ないじゃない。やばい、勉強しなきゃ」

「徹夜したけりやすればいいが、その時は戻ったらお館様に報告するからな」

……まさかファルコの一言に、撃沈させられる日がこようとは思ひもしなかった。

シーカサリーの街は、元々は修道院とその生活を支えるための小さな集落だったという。

ゲーム『蘇芳戦記』の世界はそもそも宗教色が薄い。

修道院と言っても、例えばアンジェスでは孤児院や、DVを受けた女性や虐待を受けた子供たちの避難場所的な役割を持つだけの施設だ。ギーレンでは刑務所に近い役割となり、罪人を教導するための「教官」がいて、国の歴史や法を説き、読み書きや算術なども教えたりしているらしい。

ちよつとした職業訓練所のイメージだろうか。

教官となるには一定の知識や礼儀作法を知る必要があり、いきおい、街の有力者としての地位を持つようになる。そのため、住民からの依頼を受けての冠婚葬祭の執行もその業務として加わったそう。そんな教官の「教導授業」も、やがて学のない平民たちにも無料開放されるようになって、学問的な研究の場としても、修道院は徐々に発展していったという。

基本は、罪人に労働と共同生活の尊さを教える場であるため、自給自足。庭では様々な植物が育

てられ、食用から薬用まで、多種多様な研究が同時に行われる。薬草から治療薬を精製したり、薬草を酒に溶かし込んだ薬草酒<sup>リキュール</sup>が製造されたりするようになったのは、全て修道院がその始まりなのだとか。

ベクレル伯爵家の祖先は、元々その「教官」であり、研究分野で国に大きく貢献したとして叙爵され、さらに現伯爵家に婿として入り……現在に至るらしい。

翌日、シーカサリ王立植物園に行く前、ベクレル伯爵は街と伯爵家の成り立ちを、そう説明してくれた。

「といつても研究が盛んになってくると、その研究をしたいがために、軽微な罪を犯して修道院に入ろうとする者が出てきた。それである時から、研究施設と本来の修道院とが切り離されたんだよ」

「ああ……私の国だと修道院に罪人を養う義務はなくて、専用の『刑務所』と呼ばれる所が別にあつたんですけど、それでも、捕らえられている間は最低限とはいえ衣食住が保証されるから、わざと捕まろうとする人がいるって聞いたことがあります」

「なるほど。似たようなことはどこでも起こりうる……か。なら、これ以上の説明は不要かな。ああ、もちろん修道院の規模によつては、あえてその仕組みを切り離さない所もある。あくまでシーカサリは切り離した、ということだ。そしてシーカサリにおいては、特に植物研究の規模がどんどんと大きくなり、やがて王命の研究施設を抱えるまでになった」

恐らくは、王都から馬車で三十分という距離の近さも影響を与えたに違いない。

そう思いながらも、私はベクレル伯爵の説明に対しては、頷くにとどめておく。

「ただ今でも、深夜や早朝に修道院の方から掃除や水やりのために人は来る。もちろん、もめごとを起こすような人間が来ることはない。が、さすがにゼロとも言えない。特殊な紋様を制服に縫い付けてあるから遭遇してもすぐに分かると思うが、気を付けるようにはして欲しい」

「分かりました。シャリーのお父様の家名を汚すようなことは致しません」

食事の席で「レイナ」「シャリー」と呼びあっていると聞いた時、夫妻はとても嬉しそうだった。

自分達を実の親戚と想ってくれて構わないとまで言ってくれた。

なのでありがたく、植物園で夫妻の話をする時には、そうさせてもらうことにした。

「もつとも修道院にしろ研究施設にしろ、シャリーのことやこちらの伯爵家を侮辱するような振る舞いをなさる方がいらした場合には徹底的に反撃させていただきますので、そこはご承知おき下さい」

一般的に婚約破棄は、女性の瑕疵<sup>かし</sup>と捉えられがちな世界だ。

研究馬鹿で世俗の事情を無視するタイプか、研究に行き詰まり、伯爵家に取り入ろうとして、上から目線で婚約破棄の一件を蒸し返すか、どちらのタイプも研究施設にいるだろうと思えた。

「あまり危ないことは——」

「大丈夫です。腕力に訴えるようなことはやりません。ジワジワと家ごと干上がらせて潰します。気付いた時にはむしろこちらに縋<sup>すが</sup>るしか道がないように追いこんでおきますので、その時放置され



るか、手を差し伸べて貸しを作るかは、状況に応じてご判断下さればいいようにしておきます」  
「そ、そうか」

「ふふつ、もしもの場合ですよ、もしもの」  
「あー……ただこのお嬢さん、現在進行形である伯爵家を干上がらせつつあるんで、そこはもう、誇張なくやると思っというて下さい」

援護射撃になっていないファルコの物言いに、とりあえず思い切り足を踏ん付けておいた。

「なんというか……手紙を受け取った時は半信半疑だったが……確かにアンジェス国の国王陛下と娘のために交渉をしてくれてもおかしくないのだと思えてきたな……」

——私は聞かなかったことにしておいた。



「ようこそ、シーカサリ王立植物園へ。私が研究施設の室長、クノフロック・キストだ。植物園の園長は別にいるから、修道院の教官と共に、必要に応じてまた紹介しよう」

金髪碧眼、世間的には甘いマスクと言われていそうな、意外に若手な室長サマだ。多分、イザクあたりが年齢的にも近そうな気がする。もつとも、金髪碧眼Ⅱサイコパスな某国の国王陛下を知ることとしては、露ほども心を動かされない。むしろ警戒対象になりそうなくらいだ。

私は彼を目の前に、楚々と頭を下げた。

「ユングベリ商会にて、この度新しく立ち上げます薬草部門の責任者となりました、レイナ・ユングベリと申します。この度は学びの場を与えていただき深謝致します。後ろにいますのが、当商会専属薬師イザクと、従業員のイオタです。普段からイザクの補佐をしておりますので、いい機会かと思い同行させました」

イオタ、と呼ばれた少女はややむすつとした表情でおさげ髪を揺らして頭を下げた。

言うまでもなく、シーグだ。彼女には、そのままの名前だどこでバレルか分からないということで、私の国で「春のアルビレオ」とその明るさを讃えられる二連星「蟹座のイオタ星」からとった偽名を名乗るようにと言い含めた。

本当は、某アニメの、空から落ちて来た女の子っぽく「シータ」と名乗らせたかったけど、そこらはオリオン座の四重星が由来になるので、残念ながら没だ。そこはこだわっておきたい。

だけど恰好くらいはいいよね？ と、私の趣味で変装させました。はい。

シーグ本人も受け入れてくれている。それ以上の苦情はどこからも受け付けません。決定了。齟齬に気付くのは、きつと確実にアニメを見ているだろうシャルリーヌだけだろうし。

「薬草部門ですか……」

そんなことを思う私をよそに、キスト室長は少し怪訝そうな表情を浮かべていた。

「失礼ですが、大抵の街には医師がおり、薬屋がその近くにある現在、何故商会でその部門を新設されるのかを伺っても……？」

「もちろんです。実は商会で以前働いておりました者が、あまり聞かない遠い異国の出身でして。

その者の国では『薬食同源』と言い、身体によい食材を日常的に食べて健康を保てば、特に薬など必要としない——という面白い考え方が根付いていると言っております」

「ほう」

「私が聞いただけでも、例えば『緑色の葉物野菜を毎日食べていると、記憶力と思考能力の低下を抑えられる可能性がある』とか……まあ、他にもあれこれとありまして。この王立植物園は、薬用にしろ食用にしろ、屈指の量と種類があると聞いております。ですからぜひ、こちらで植物が持つ可能性の限界を見極めさせていただきたいと思ひまして」

「それは我が国でも初の試みだ……！ 遠い異国とはいえ、そのような考え方がされていようとは！」

やはり研究施設を預かるだけあって、この室長もかなり薬草オタクの部類に入る人なんだろう。いきなり目が爛々と輝き始めた。

そして今更ながら、私は薬より食材としての研究が希望とした方がいいと言った、イザクの意見が全面的に正しかったことを知った。研究者と張り合うというのも、さもありなんだ。

「イザクとイオタは、せっかくですから本職である薬用植物の研究を学ばせたいのですが、私は薬に関してはそこまで詳しくありませんし、むしろ、この新しい研究に全力を注ぎたいと思っています。商会の未来もかかっていますから」

あくまで私には別の目的がある——そう前面に出せば、キスト室長も納得したように頷いていた。「なるほど、そういうことであれば、当研究施設は貴女がたを歓迎致しますよ！ ユングベリ嬢、

貴女の研究には、ぜひ私も加わらせていただけませんか？ 研究成果を横取りするつもりは決して

ありません。室長となつて以降、なかなか研究の前線に立てる機会もありませんでしたので、無償でもいくつかいいますから、何とぞ！」

「……………え」

——果たして上手く入り込めそうな事を喜ぶべきなのか、研究オタクの執念に慄くべきなのか。今の私には、判断がつかなかった。

この世界の単位を聞いても、敷地面積がよく分からないのが難点だ。とりあえず現在園内に約一万五千種の植物が生育し、およそ百万枚の乾燥標本が収蔵されている……らしい。

園内は基本的に芝生が敷き詰められていて、一般開放されている方にも、そうでない方にも、複数のガラス製の温室が建てられ、季節を問わず見学や研究が出来るように工夫されているようだ。

一般開放区画だけでも見学に三時間はかかるとなれば、もう、ちょっとしたテーマパークだ。

キスト所長に教わった、研究員用の通用口から一般開放区の方に入场させてもらう。研究施設の見学と研究員への紹介は明日にしようとのことだ。

「——イオタ、口が開いてる」

敷地の広さと所有している植物の数に、イザクが目丸くしてるのは分かるにしても、イオタ、もといシーグがポカンと口を開けて周りを見回しているのは、ちょっと意外だった。

「来たことなかったんだ？」

「ない。……あ、なかった、です」

一応「商会の跡取り娘」と「使用人」設定を思い出したらしい。慌てて敬語に切り替えている。「純粋な疑問なんだけど、じゃあ、イザクもイオタも独学で薬草の勉強をしたってこと？」

「まあ……『組織』に入った時に、おせっかいにも教えてくれたヤツがいましてね。今は年くつて田舎に引つ込んだみたいですが」

「私も似たようなものだ。……です」

「へえ……ちゃんと先輩後輩があつて、技術指導的なコトはするんだ」

私を感じているのがおかしかつたのか、イザクが僅かに眉を顰<sup>ひそ</sup>めている。

「相変わらず、感心するところが他人とずれていますね、お嬢様」

二人とも、ユングベリ商会従業員設定を受けての敬語ではあるけれど……なんだろう、イザクの発言の端々に、そこはかとなく厭味が含まれている気がする。

「何それ、失礼ね。知つておいて損になるコトなんてないんだからね。どこで役に立つかなんて、誰にも分からないだから」

「まあ、それはそうだ……いえ、です」

「それにしたつて、普通は領地から近い野山を駆け回るか、庭でも自力で育てて学ぶかしか出来ない。公的費用で研究が出来るとか、相当恵まれた環境にいる連中であることは間違いないですよ。今回思いがけず機会をもらつたことですし、お嬢様が二の次になつても研究はしてみたいです  
がね」

護衛の本分を放り投げた発言を堂々としてのけるイザクに、意外にシーグの方も「……私も」と本音を零していた。

どうやらここにも薬草オタクたちがいたようだ。

「ちゃんと後で公爵邸なり『鷹の眼』なりに還元はしてよね……」

私が嘆息すると、シーグの方がちよつと驚いていた。

「うん？　どうかした、イオタ？」

「お嬢様……怖くないんですか。もし本当に一人残されたら……」

「どうせ私、腕っぷしゼロだからね。ぎゃあぎゃあ言つたつてしょうがないのよ。ただイザクたちは、お金貰つて生業<sup>なりわい</sup>にしているプロでしょう？　だから本当に危なくなつたら、最低限の世話はしてくれるだろうと思つてるだけ。それでも裏切られたら、お金なり信用なり、こつちに足りない何かがあつたんだろうと思うから、その時は潔く諦めるわ」

「……っ」

「まあそうやつて、良くも悪くも丸投げだから、逆に誰も裏切らない。俺らの仕事を恐れず蔑まず理解してくれる存在がいかに貴重か。おまえも裏の世界に足をつ込んだ人間なら分かるだろう」  
シーグの動揺にイザクが追い打ちをかけるようできて、案外良い先輩？　というか、目をかけているような気がしないでもない。

「まあまあ。悩んで成長することは若者の特権でしょうよ、イザクさん」

「……お嬢様はおいくつで？」

ポンポンとイザクの肩を叩いたら、物凄く冷ややかな視線を返されたけど。



「お館様の居場所が分かったぞ」

ファルコを筆頭とする“鷹の眼”の皆と、現王宮護衛騎士トーカレヴァは、なんとその日の内にエドヴァルドの居場所を突き止めてきた。

ファルコの言葉に思わず目を丸くしてしまう。

ここはギーレン。他国だというのに、その優秀さには恐れ入る。

もちろん空気の読める私は「どうやって」なんてことは聞かずに、続きを促した。

「今は王宮みたいだが、明日から王都郊外のナリスヴァーラ城とやらに行くみたいだな」

「ナリスヴァーラ城」

どんな所かとベクレル伯爵に尋ねてみたところ、以前に断罪されて家ごと取り潰された王族が住んでいたお城だと言われて、驚く。

もしかするとそこは、かつてのオーグレーン家当主、アロルドの居城ではないだろうか……？

黙って聞いていると、伯爵が言葉を続けた。

「元は戦争が起きた時に王都を守る砦のような意味で作られたようだから、他の王族の城に比べるとそれほど大きくはなく、様式も石造りの重厚な物だ。一国の宰相をお泊めするようなところでも

ないと思うのだが……」

なるほど、普段はあまり注目されることのない城ということか。

ベクレル伯爵は首を傾げていたけれど、私はなんとなく、エドヴァルドが相続放棄の手続きの一环として、そこに行こうとしているように思えた。

「王都からは馬車で二十分とかからないくらいだと思うよ。すぐに迎えに行くのかい？」

「いえ。昨日も言いましたが、勝手に連れ帰ると国際問題になりますから……ただ、私たちがギーレンに入国してきているという連絡だけは、取っておきたいかなと思います。それと……」

「それと？」

言いかけてから、一瞬、私は口もとに手をあてた。

エドベリ王子にしろベルトルド国王にしろ、エドヴァルドをギーレンから出国させたくないはずだ。果たして素直に相続放棄の手続きをさせるのだろうか……？

これまでだって、本人が現地に来て書類に署名をしないとイケないなどと言われて、正式な放棄が出来ずにいたと聞いている。

さすがのエドヴァルドも、己の身に差し迫った案件として降りかかってこない間は、ギーレン国の法律などそこまで詳しく確かめなかったに違いはないからだ。

法律の専門家を探した方がいいかもしれない。

「あの、ベクレル家には、法律顧問のような方はいらつしやるのですか？」

とりあえず遠回しに確認してみる。

意図が読めなかったらしい伯爵は、法律顧問？ と、不思議そうに聞き返してきた。

「いや……そういった人材を抱えるようなことは、ギーレンではしないのだよ。各領主が治める土地に根付いた専門家がそれぞれにいてね。だからシーカサリーの街の方に事務所があつて、そこに所属している職員を要件に応じて派遣してもらう仕組みになっている」

「なるほど……」

「必要なら紹介状は書くよ」

「そうですね。もしかしたらお願いするかも知れません。そのあたりは、宰相閣下との連絡が取れるようになってから、考えたいと思います」

王家に楯突く可能性があると分かった際に及び腰になられてしまう可能性もある。

とりあえず今は、焦つて話は持ち込まない方がいい気がした。

「キスト室長の懐に思つたよりも入り込めそうなので。まずは目の前のことからこなしていきます」

私の言葉に、ベクレル伯爵が微妙な顔になる。

「キスト室長か……」

「お親しいですか？」

「まあ、今は誰にしる没交渉の状態だからなんとも言えないがね。ただあの年齢で室長になるからには、清廉潔白なだけでは難しいだろうとも思うよ。見た目に惑わされた人間が何人か失脚したことから、私でさえ知っているくらいだからね」

ベクレル伯爵は、私が室長に好意を持ったとも思つたのか、父親目線で心配してくれたみたいだ。だけど断言してもいい。それは「杞憂」以外のなものでもない。

「大丈夫です。私もともと、金髪碧眼の美形をこの世で一番信用していませんので」

——そんな、鳩が豆鉄砲を食らったみたいな顔をしないで下さい、伯爵。

翌日、王立植物園の研究施設で、キスト室長から短期留学生として、私とイザクとイオタが紹介された時の研究員たちの反応は、ある意味予想通りだった。

無関心か敵視。視線どころか、敵意のこもった声まで聞こえてくる始末だ。

『チッ……どうせ室長目当てのお遊びで来たんだろうが。こっちはヒマじゃないってのに』

うん、まあ、初日くらいネコかぶつても良かったんだけど、これはちょっと無理かな。

聞こえるような小声なら、言わないか、もう普通に話せばいいと思う。

よりによって室長の名前を出しての、この発言。私自身のためにも、一研究員としての室長への態度としても、無視しておいていい話ではない。

私は、そんなセリフを吐いた男性の前に歩み寄るとにつこりと微笑んだ。

『テルン・スヴェンソン研究員——自分の容姿が人並み以下な八つ当たりを、こちらに向けるのは筋違いではありません？ 私は家業のためにここに來ております。まあ、室長のアタマの中身を目当てにさせていた点是否定しませんが、アナタの器がとても小さくて、アタマの中身さえ目当てに出来ないということは充分に理解しましたけれど』

というか、室長の取柄が、頭よりも「顔」だと言っていることに気付いた方がいい。それって私を下げているようで、室長も下げているというのに。

『文句がおありなら、ユングベリ商会までどうぞ。まあご実家で、嗜好品が取引中止の憂き目にあつてもよろしければ——ですけど』

胸元のネームプレートを見せながら、ふふふ……と笑うと、何故か部屋全体がどよめいた。

小娘が言い返したのがそれほど意外なのかと思ったら、理由はまるで違ふところにあつた。

「ユングベリ嬢は……ヴェサル語が話せるのかい？」

「えっ？」

キスト室長の言葉から敬語が外れている。ハッと周囲を見渡すと、色々な方向から驚愕の視線が向けられていた。

「ヴェサルは、王都から遠く離れた海上の島国で、島民の中には共通語を話せない人も多い。彼らが王宮に来る際には、通訳の日程を確保するのも毎回一苦勞で、一度は島出身の、そのスヴェンソンすら呼ばれたことがある難しい言語なんだが……」

しまった。どうやら異世界での「言語補正」に気付かず相手の言葉に言い返した結果、自爆ぎみに注目を浴びる結果になったらしい。聞こえない、あるいは理解出来ないだろうと思つて母国語で悪口を言うとか、どれだけ器が小さいんだと、思わず舌打ちしそうになった。

「……これでも商会の跡取りですから。読み書きに関しては、まだ勉強中の国も多いですけど、話すことに関しては、ほぼ不自由がないようにしています。契約とて、まずは話をしなければ成り

立たないことでしょうか？」

果たして「商会の跡取りですから」で、いつまでどこまで押し切れるか。なるほどと呟くキスト室長の表情からは、何も読み取れない。

「ユングベリ嬢の前では、うっかり内緒話も出来ないということか」

「いえいえ。男性同士の恋愛話くらいでしたら、ちゃんと聞かなかつたことにしますよ？」

私がそう言つてニコリと笑えば、一瞬、虚を突かれた表情を見せたものの、キスト室長もすぐに可笑し<sup>おか</sup>そうに笑い声をあげた。

「だ、そうだ。皆よかつたな。それとスヴェンソン、まあこの研究施設に、研究目的以外の女性が度々押しかけてきている事は確かだが、そんな人種はそもそも『留学生』と認めてはいないのだから、一括りにして考えるのは、私にも彼女にも失礼だよ。もう少し視野を広くした方がいい。——本業に支障をきたす前に」

ただし最後の一言でその笑みは消え失せて、言われた方はすっかり顔色が変わつていた。

「……あの、難しい言語と仰いましたけど、何気に室長も理解されていらつしやるのでは？」

別に当の研究員を庇うつもりはなかつたけれど、ふと氣になったことを聞いてみる。

答えの代わりに向けられた、キラキラと言う形容詞が当てはまりそうな笑顔は、ヤバいという部類に区分される氣がした。

「研究の邪魔をされるのが嫌で、今までは知らないフリをして、王宮が通訳を探している時にもとばけてきたのに……ユングベリ嬢のおかげで、隠し通せなくなつてしまつたよ」

「え」

「そうだ、次に機会があったら、私からユングベリ嬢を推薦するから、留学が終わってからでもぜひ交流は続けさせてもらいたいな」

「……っ」

墓穴掘ってるな……という表情のイザクと、私とそのヴェサル語とやらを話した驚きに目を見開いているシーグは、どうにも助けにならなそうだ。いや、次なんてない。その頃には私はアンジェスに戻っているはず——と、内心で言い聞かせておく。

「まあ、ここはこのくらいにして……ユングベリ嬢は新しい研究、あとの二人は既存のところを学びたいということで間違いないな？ そっちの二人はサンダーにしばらくは付いてもらおうか。彼はこの施設の次席研究員だから、聞けば大抵のことは答えてくれるはずだ」

別に「何故首席じゃないのか」とケチをつけたい訳じゃないけど、純粋な疑問はあった。

そんな私の微妙な表情を読み取ったのか、キスト室長は端的で射た回答を投げてきた。

「別に君たちを含むところがある訳ではないんだ。単にウチの首席研究員は天才肌なものだから、誰かにモノを教えるということが壊滅的に出来ないだけだね。だから次席のサンダーにした」

……よく分かりました。たまにいますね、そんな人。

そうして私たちはそれぞれ、別の部屋に案内される形となった。私も、室長と一対一でべったりという訳ではないようだったので、じゃあいいか、となったのだ。

「ちなみに、あの廊下の奥が書庫だ。ネームプレートは入館証も兼ねているから、それを見える

ところに付けて、書庫に入る時と出る時に名前と時間を書き記すようになってる。まあそっちも、ちよつとした蔵書量は誇っていると思う」

その言葉にハツとして、私はキスト室長に視線を向けた。

「あの……こちらでは、本の作製や印刷ってどうされているんですか？ それだけの蔵書量だと、書き写すのも大変ですよね？」

さりげなく探りを入れてみれば「さすが商会のお嬢さんは、面白いところに着目する」と、キスト室長が柔らかい微笑と共に振り返った。

「私はあまり詳しくないが、鉛で出来た文字を一字ずつ拾って組み合わせ、その版の出っ張っている部分にインクを付けて、紙に転写する——とかなんとか、業者が前に言っていたかな？ 気になるなら、週に何度か納品に来る本の業者に聞いてみるといい」

どうやらギーレン国内では、じわじわと活版印刷が広がりつつあるらしい。

そういうことなら、思ったより早く小説をばら撒けそうだと、つい口元がほころぶ。

「そうさせて下さい」

どうにも見た目通りじゃなさそうな室長ながら、やはり懐に入り込むだけの価値はありそうだった。

「一般開放されていない区画の畑と花壇だけでもこんなにあるんですね……」

キスト室長から、これから机を並べる研究員の紹介を一通り受けた後は、とりあえずこの植物園



で育てられている実験用の畑や花壇を、頼んで見せてもらうことにした。

知っている野菜の名前とまるで一致しないのは「スヴァレーフ<sup>じやがいも</sup>」で学習済みだ。

もうこれは、実物をこの目で見た方が早いだろう。

「それで、調理もしてみたいと？」

「その遠い異国出身の者が持っていた薬物野菜や香草は、ここにあるものとことごとく名前が違います。どう見てもそっくりなものが多々あるので、あとは味をみて共通しそうな点を確かめるしかないな、と。共通性が分かれば、私以外の方でも実験は出来ますよね？」

「確かに……」

「とりあえず収穫可能な範囲を教えてくださいませんか？　その後で食堂の厨房を使わせていただけたら有難いです。室長もお忙しいでしょうから、厨房のどなたかに話だけ通しておいていただければ、後は試食して、薬食同源に該当する植物があればそれだけを持ち帰るようにしますので」

「あ、ああ」

私がそう言うと、キスト室長は一瞬不思議そうな表情を見せたものの、そのあとすぐに「ああ！」と、一人で得心したみたいに頷いた。

「ユングベリ嬢には、恋人かあるいは婚約者がいるのか」

「え？」

キョトンとなった私に向け、キスト室長は自分の首元をトントンと叩いた。真面目に学ぶ気があるとさっきの騒動で知れたからか、口調から丁寧さが取れ、上役としてのそれに変わっている。

「私はそれほど宝石に詳しくないが、それが安い石ではないということくらいは分かる。それ、贈り物だろう？　自分で言うのもなんだが、私のこの顔は女性受けしやすい。貴女がまるで私に興味を持っていないことを考えても、既に慕っている誰かがいるのだろう、と」

「!?」

私は思わず自分の胸元を飾るネックレスに手をあてていた。

そうか。通常のタイプよりチェーンが短いと言っていたから、何を着ても見えるんだ。

「こ……これは、常に身につけていないと怒られるというか……会えない間はつけないでもいいだろうと言われると、そうでもなく……きつとどこからか、そういう横着はバレて後で怒られるというか……いや、そんなことはないんです！　室長、世の女性のほとんどが自分を振り返るとか、そもそもだいたいぶ自意識過剰ですよ!？」

ビシリと室長を指差して言う。けれど、何故かキスト室長はいつまでも笑っていた。

「分かった、分かった。貴女は私を籠絡しに来た訳でも、研究資料を盗みに来た訳でもない。それが分かれば、こちらはいいいし、皆の態度とて、もう少し柔らかくはなるだろう。何しろここには前例が多すぎるんだ。一応、私にも相応の言い分はあるつもりだ」

「……はあ」

幾分、淡白な答えにはなっていたと思う。

金髪碧眼のイケメンを、簡単に信用しようとは、私も思っていない。

多分、きつと、信用しきれないのはお互い様だ。

「では私は、少し通常業務を片付けてこよう。厨房には話を通しておく。貴女なりのキリが付いたら、声をかけに来てくれ。定時を過ぎるようなら、それもその時点で声をかけるように。さすがにいきなり残業させるつもりはないから」

そう言うと、キスト室長は□元に笑いを残したまま立ち去っていく、私は一人、花壇と畑の境の小道に取り残された。もちろん、目に届く範囲で他の作業をしている人たちもいるため、厳密には一人と言えないのかもしれないが。

「チチチッ！」

その時、頭の上に小さな可愛らしい鳴き声と共に、何かがぼすつと落ちた感覚があった。

「えっ、あつ、リファちゃん!」

頭の上からそつと下ろせば――相変わらずの、悶絶級の可愛さを誇るシマエナガ、じゃなく、ヘリファルテの白い「伝書鳥」が、掌に転がった。

どこから飛んできたのかとあたりを見渡せば、花壇の奥に広がる人工林の木の陰から、トーカレヴァが小さく手招きをしている。

私は植物を探すフリをしながら、ゆっくりと歩を進める。木を挟んでトーカレヴァと背中合わせになりつつ、さも植物を眺めているかのように屈み込んだ。

多分これで、周囲にはバレずに会話が出来るはずだ。

「イデオン宰相を乗せた馬車が王都を出たようですよ。事前の情報の通り、ナリスヴァーラ城に向かったのだと」

「……そう。だけど、わざわざそれだけを言いに?」

その程度の情報なら、仕事終わりに植物園を出た後でもいいはずだ。

イザクやシーグも合流しているのだから、説明は一度で済むだろうに。

そんな私の内心を知ってか知らずか、トーカレヴァはゆっくりと首を横に振った。

「どうやらギーレン王宮派遣の使用人たちの中に、我々のような裏方の人間もいるらしく……連絡が取りづらそうだと、様子を見に行つた『鷹の眼』の一人がファルコに報告をしたみたいですね」  
「裏方って」

既にトーカレヴァは特殊部隊から王宮護衛騎士にジョブチェンジした状態のはずだけど、まだ以前の意識が残っているのだろうか。

それはともかく、じゃあどうするつもりなのかと、言葉に出さないまでも眉を顰めた私に、トーカレヴァは私の掌で転がるヘリファルテを指差した。

「コイツを飛ばして繋ぎさえ取れば、あとは『鷹の眼』同士なんとも出来ると、ファルコが」  
まさかこの小柄なヘリファルテが手紙を運ぶなどと誰も思わなかったため、こういう時には頼もしすぎる連絡手段になると聞いてはいたけど……まさに今が、その時ということなのかもしれない。

その上で、私は顔を顰めた。

「ねえでも、リファちゃんに『エドヴァルド様に手紙を届けて』なんてお願いしても、理解は難しそうじゃない? 今って、私とレヴとの間くらいしか往復してないでしょ」

トーカレヴァ・サタノフという名前自体、本人はあまり好きではないらしい。先の政変で既に死

んだ名だというのがその言い分で、周りには「レヴ」呼びを強要して回っている。

レヴと呼ばないと、ヘリファルテは貸さないと言われて以降、私も潔く白旗をあげている。

この愛らしさの前に、意地を張っても仕方がない。そんな私に、近頃周りも諦めぎみだ。

「そうですね。どなたかが、なかなか手放して下さらないので、結果的にそうなっていますね」

チャリとトーカレヴァの視線がこちらに向くが、そこはキツチリ無視しておく。

「……これまで詳しく説明をする機会もなかったですが、元々ヘリファルテは、この魔道具に取り込まれた魔力の持ち主を目がけて飛ぶように仕込まれているんですよ」

そう言うと、トーカレヴァは懷からゴルフボールサイズの小さな球体を取り出した。

「それはリファちゃん限定？ それともヘリファルテ種全般の話？ つていうか、私、魔力ないけど」

「どうでしょうね……これは管理部の友人が以前実験的にくれた魔道具で、持っているのはまだ私だけなものですから、なんとも。他のヘリファルテでも、私が仕込めば同じように手紙を運ぶようになると思います。断言は出来ません。ちなみにレイナ様の場合、初回はイザク目がけて飛ばせたんですよ。まああの地下牢で、拷問とは言いませんがイロイロとやってくれたものですから、彼の魔力を仕込むことは割と容易<sup>たやす</sup>かった」

「……そ、そう」

「二回目からは、貴女があまりに可愛がって下さるものだから、単にコイツが懷いたんですよ。一応、魔力を仕込まずにコイツを放てば私のところに戻る仕様のはずなんです……最近では貴女め

がけて飛ぶようになってしまった」

「ああ、だから私が飛ばせばレヴの所に戻るし、レヴが魔力を仕込まずに飛ばせば、私の所に飛んでくるようになったんだ……」

手元に視線を落とせば、正解だとも言うように、リファちゃんが「ぴっ！」と短く鳴く。

——いつ見ても、やっぱりカワイイ。

「それで話を戻しますが、レイナ様が身につけておられるそのネックレス、それをちよつと使わせていただけますか」

「え、コレ？」

今日はよくネックレスに注目が集まる日だと、私は胸元の青い石を撫でた。

「ファルコが言うには、イデオン宰相からの贈り物だそうですね、それ。しかも迂闊に値が付けられない程の希少石だとか」

「思い出させないで……気にしたら、怖くてつけられなくなるから」

思わず地面に「の」の字を書きそうになった私の気持ちなんて、きつと分かるまい。庶民がちよつとやさつとバイトして稼げるような金額でないことくらいは、私もヘルマンさんから聞いている。

「何もずつと貸せと言っている訳ではないんですよ。一瞬<sup>一瞬</sup>掌に乗せて、そこにある魔力をこちらの装置に移させてほしただけですから」

トーカレヴァの言ったことがとっさによく分からなかった私は、顔を上げた。

「魔力を……移す？」

「自分の髪や瞳の色を宿した宝石を贈ること自体、生半可な思いですることではありませんからね。それほど宝石となれば、イデオン宰相の魔力が相当に残されているだろうと、そういう話になって」

「からか 揶揄われているのか、そうでないのか。」

反応に困る私は、パクパクと口を開けるしかない。真面目な顔のままトーカレヴァは続けた。

「上手くいけばそのネックレスにある魔力を使つて、ヘリファルテをイデオン宰相の所までやれるのではないかと。それでこちらまで参上した次第ですよ。ファルコはかなりイヤそうでしたが、その仕込みが出来るのは私だけですからね。という訳で、私が魔力を仕込んでいる間、イデオン宰相様に一筆書いて下さいますか。道具は持参してきましたから」

「一筆って……」

「書ける文章量には限りがありますから、とりあえずは今ギーレンのベクレル伯爵邸にということの後、鷹の眼”たちがどこかで接触するということ、それだけで宜しいんじゃないですか。後はまた、おいおいやり取りをしていかれたら」

本来なら、ヘリファルテの足に巻き付けられる手紙自体、書けるのは十数文字が限界だ。

そこは特殊な用紙を使つて、魔道具で小さくして、足に付いた円筒に入れ込むのだけれど、それでも、文庫本サイズの用紙一枚分なので、書けることは限られる。

もう、魔法の世界は私の理解の外側の話なので、言われた通りの内容を手紙にしたためて、トー

カレヴァに預けるしかない。

「リファちゃん、行ける？」

トーカレヴァが手紙をセットしている横から、リファちゃんの顔を覗き込む。

「びっ！」

どうやら「任せて！」と返事をしてくれたようだ。

ネックレスに魔力があるかどうかも分からなければ、見知らぬ土地で、大勢の人の中からエドヴァルド一人を捜し出せるのかという不安もある。

けれどリファちゃんは、こちらを安心させようとするかのように、頭上で何度か旋回すると、小さな羽を飛ばたかせて飛び立って行ったのだ。

——うん、リファちゃん頑張れ！

## 【閑話一】エドヴァルドの邂逅

レイナが「夜這い除け」に実験してみようと言い出したという、害獣を吹き飛ばすための風魔法が込められた農業用の罫の魔道具。それはギーレンの王宮滞在初日の夜に、仕掛けた側も忍び込もうとした側も、双方が驚愕するという矛盾した事態を引き起こした。

「ちよっと……持ってきたのが大型の害獣用だったのが効果ありませんでしたかね……」